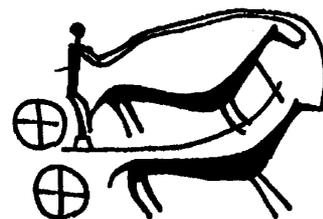


センターニュース

Hokkaido University
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター

Newsletter No. 53



TOEFL-ITPの実施状況

(3 ページ)

ますます重要になってきたTA研修会

(8 ページ)

インターンシップ説明会開催される

(19 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言

FOREWORD

北大らしい生涯学習システムの構築に向けて

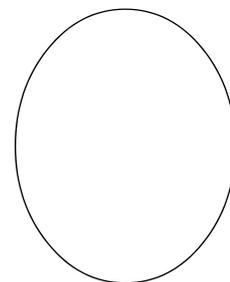
生涯学習計画研究部長 野口 徹

この度、徳田昌生先生の後を受けて、本センター生涯学習計画研究部長を務めることになりました。私の専門は機械工学ですので、これまでのセンターとの関わりはさほど多くはありません。しかし、総合講義や一般教育演習の担当、大学院の教育に関連して研究員を2年間務めたこと、および入学試験関係の実務や委員の経験などから、センターの活動にはいつも関心を持っていました。平成14年からの2年間はインターンシップ専門委員として生涯学習計画研究部の先生方と一緒に仕事をしましたので、これがご縁になって今回の任を与えられたものと思います。

生涯学習計画研究部はセンターの全学教育部の他の3研究部のひとつとして1995年に設けられまし

た。これは1990年に制定された「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律（通称生涯学習振興法）」の趣旨に則ったものです。同法は大学の教育活動を在学生と在

学期間に限定することなく、広く国民全体の生涯にわたる学習、教育機会の増大に寄与させるよう要請しています。現在、生涯学習計画研究部（以後生涯学習部）では3名の専任教員を中心に、「北海道大学公開講座」の企画実施のほか、市民対象の各種講演会、道民カレッジ等の地域生涯学習への参画、地域企業と連携しての学生のインターンシップ教育など、生涯学習



に関わる幅広い実践活動を行っています。さらに北大の生涯学習部の特徴として、生涯学習やユニバーシティエクステンション（大学教育の拡張）に関する国際的な視野での調査研究、あるいは地域ニーズの調査に基づいた公開講座や高大連携の手法等の研究を行ない、その望ましいあり方の提案など、多数の研究成果を発表しています。2003年度は本センターの設立8年目で、外部評価者による活動状況の点検評価が行われました。その中で生涯学習部は、実践（＝地域サービス）とともに独自の研究活動を行っていることに高い評価がなされ、またその成果の積極的発信が期待されています。

大学が担う生涯学習機能のひとつは、その高度の教育機能を地域社会の要請に活かすことです。これは教養的なものには留まりません。例えば工学分野では、かつて、道が主催する「中小企業長期技術者研修」なる制度があり、私も10年近くその講師を務めました。これは道央地区の各種製造業の技術者達が、夜間4時間の講義をほぼ1年間にわたって履修するもので、科目は工業数学、工業英語などの基礎科目から材料力学、電磁気学、金属工学等の専門科目までが含まれ、修了者には短大卒業と同格の修了証書が交付されました。この制度は昭和50年代で任を終え、より高度な技術課題の特別講義群からなる「北海道移動大学講座」に引継がれました。ここでは出張講義のほか、テレビ会議システムを利用した遠隔地講義が試みられ、工学部と道内数力所の拠点を結んで、同時双方向性の講義を提供しました。現在は関信弘名誉教授が主催し、30数社が加盟する任意団体に受継がれています。私は外国の各種製造工場を訪れる機会が多いのですが、昨年訪れた米国の自動車部品製造会社では、社内技術教育の一部を近隣の大学に委託し、その単位の累積によって修士号が取得できる制度が整備されていました。授業は大学での講義、企業の研修室、情報機器利用の3形態が使い分けられています。北大でも色々な分野でこのような形態の専門教育が可能だと思います。

北大の生涯学習機能のもうひとつの使命は、本学学生の教育付加価値を高めるために、入学前から卒業後までを含めた教育を考え、これに必要な学外教育

機能と連携することです。高大連携およびインターンシップ事業がこれに位置付けられます。北大のインターンシップはようやくその体制が整いつつある段階ですが、その教育効果は顕著なものがあり、全国的・国際的な動向から、是非推進する必要があります。前述の米国企業では、社内教育委託と交換に大学からのインターンシップを受入れ、学生の卒業単位に認定される仕組みになっていました。私は大学院学生を夏休みに外国企業で研修させる国際インターンシップにも携わっていますが、その教育効果はさらに大きいものがあります。実施時期、責任体制等多くの解決すべき課題がありますが、北大が国際性の涵養を教育のひとつの柱とするのであれば、このような制度の充実が緊急の課題です。同時に、大学として、外国人も含めたインターンシップ研修生を受け入れる体制が必要でしょう。

卒業生のアフターケア教育としては、博士後期課程への社会人入学、論文博士の指導が制度として確立していますが、私の場合はこの他、地域企業、本州企業からの技術相談が年間数十件に及び、卒業生からの相談も多数に上ります。この中には継続教育的な要素も多く含まれています。他の分野の教員についても、このような需要が少なくないはずですが。これらに対して、大学院講義の優先的な聴講などの対応が考えられますが、本学の卒業生の大部分が本州に在職し、定期的な聴講が難しいことから、本州の中心的大学とは異なった仕組みの必要性を痛感しています。一方、法人化後の大学運営ではその総合力向上に事務職員の企画立案への寄与が不可欠です。北大職員を対象とする継続教育、大学院教育の制度的確立も強く望まれるところです。

研究における産学連携、地域社会連携は先端科学技術共同研究センターを窓口としてかなりの実績とノウハウが蓄積されています。教育機能に関しても、地域社会（これは北海道だけに留まるものではなく、全国的、世界的展開も含むと理解すべきです）との連携を図る窓口の設置、機能の充実が望まれます。将来を見据えながら、センターの教員職員の方々と協力して、北大としての特色ある生涯学習システムを構築していきたいと考えています。

全学教育

GENERAL EDUCATION

平成15年度TOEFL-ITPの実施状況

言語文化部英語教育系 TOEFL-ITP実施委員 伊藤 章

外部英語検定試験，TOEFL-ITPが本学で導入されることになった経緯については，すでに『北大時報』592号（2003年7月）で触れられているので，ここでは昨年はじめて全面展開した本試験の実施状況，具体的には，いつ試験が実施され，何名の学生が受験し，その成績がどうであったか，最後に実施上どういった問題点があり，どう改善すべきか述べたい。

まずTOEFL-ITPという用語について。TOEFLは英語圏，とくにアメリカ合衆国の大学と大学院に留学するにあたって，受験を義務づけられ，受け入れられるには一定程度以上の成績を求められる世界的な英語検定試験であることは広く知られているが，ITPというのはその過去問題からなる試験である。したがってTOEFL-ITPは「TOEFL公式模試」とでも了解すればよいだろう。

昨年度の場合，第1学期は6月14日（土）に理学部の1年次学生と医・歯・水産学部の2年次学生を対象に，第2学期は12月6日（土）に文・教育・法・経済・薬・工・農・獣医学部の2年次学生を対象に実施された。受験者数は第1学期692名，第2学期1729名，計2421名，欠席者（登録手続きを行ったのに当日受験しなかった者）は第1学期13名，第2学期48名，計61名，未登録者（授業の途中放棄とか他の理由でそもそも登録手続きを行わなかった者）は第1学期8名，第2学期126名，計134名であった。なお正当な理由があつて本試験を受験できなかった者につ

いては，次週の火曜日に追試験を実施している。

学部別の平均点は表の通り。第1学期と第2学期と問題の種類は違うが，この試験は問題の種類によって差がでないように作成され

ているので，全学部を同じ表にまとめた。これが平均的な本学学生の現在の英語力であると考えてよい。学部レベルで留学する場合，677点満点で500点以上，大学院レベルでは550点以上というように設定されていることが多いのを考えると，一部の学部を除けば，平均的な北大生の英語力はまだまだ低いと言わざるをえない。

必修の英語IVを受講する全学生（再履修生も含め）約2600名に受験させるのであるから，準備段階において担当教官に念入りなオリエンテーションを行ってもらつとか，登録時期には注意を喚起してもらつとか，試験終了後は学生1人1人にスコアを返却してもらつとか，実施委員は連絡調整に苦労するし，事務方のあちこちに頭を下げるということをしなければならない。実施面で全面協力してくれている北大生協の苦労にも並々ならぬものがある。しかしTOEFL公式模試の導入は本学が「国際性の涵養」という基本理念を打ち出すなかで生まれた制度であるので，全学教育委員会と事務部のますますの支援を求めたい。

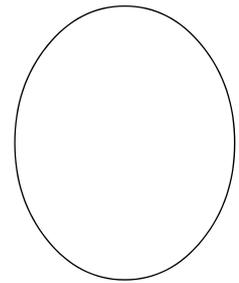


表 平成15年度TOEFL-ITP学部別平均点

文	教	法	経	理	工	農	獣	水	医	歯	薬	平均
473.1	464.7	462.7	457.4	472.4	442.6	465.1	489.7	456.3	525.8	469.3	484.7	472.0

なぜこのようなことを改めて言うのか。せっかく良い制度を導入したのに、その実施はかならずしも円滑に進んでいないからだ。たとえば教室の使用に際して、借用手続きがより円滑に進むようお願いしたい(全学教育の一環として実施しているのに、教室使用料うんぬんの話は以後無用に願いたい)。実施上の煩瑣な業務を一手に引き受けてくれている北大生協が効率的に業務を遂行できるように事務方になお一層の協力をお願いしたい。事務職員のいない土

曜日に実施するので、問題が発生した場合の対応が適切に計られるようにしていただきたい(昨年12月、一部の教室で暖房が通らなかった)。成績処理上なによりも、教務電算室あるいは教務掛には、正確な英語IVの履修者名簿を可能な限り早い時期に頂戴したい。TOEFL-ITPがこれからも暗礁に乗り上げず無事に航行するためには、英語教育系と北大生協、全学教育委員会、事務部の協力体制の充実が俟たれる。

全学教育委員会報告

2月23日(月)に第53回(平成15年度第6回)全学教育委員会が開催され、つぎのような議題について話し合いました。

議題1. 北海道大学高等教育機能開発総合センター全学教育委員会規程の一部を改正する規程(案)

議題2. 北海道大学全学教育科目責任者等に関する要項の一部を改正する要項(案)

議題3. 平成16年度全学教育科目の追加開講等

議題4. 平成16年度全学教育科目に係るTAの任用予定

議題5. 成績評価結果の公表及び極端な片寄りのチェック

議題6. 附属図書館北分館委員の推薦

報告事項1. 一般教育演習(集中講義)の履修調整

報告事項2. クラス担任のアンケートで出された意見への回答

報告事項3. 平成16年度全学教育科目に係る既修単位の認定

報告事項4. 平成16年度第1学期の履修調整

報告事項5. 平成16年度新入生オリエンテーション及びクラス担任会議

報告事項6. 平成15年度全学教育委員会の検討事項

報告事項7. 高大連携授業

議題3では、前回の委員会以降の追加開講(インターシップ科目等)・開講取消が了承されました。

これにより、各部局の授業担当状況(別表)が確定しました。

議題4では、各部局から推薦されたTA任用予定者が報告され、センター運営委員会に諮ることになりました。

複合科目、CALL授業等については、各研究科に募集をお願いし、必要な人員が確保できました。

15年度第1学期の成績評価分布状況の公表および極端な片寄りのチェックの方法

議題5では、安藤センター長補佐から、平成15年度第1学期全学教育科目の成績評価分布状況の公表および成績評価の妥当性の検討の方法が報告され、了承されました。

1) 成績評価分布状況(優・良・可・不可の%)の公表方法

- ・平成16年度にも同一科目を担当する場合は、各教員がシラバスに記入して公表する。
- ・科目別の平均値の一覧表を、本学ホームページ(シラバス検索)に載せる。
- ・授業科目・担当教員別の一覧表を、掲示および印刷物で3月中に学内に公表する。

2) 成績評価の妥当性等の検討方法

- ・小委員会の下に「成績評価・授業評価結果検討

専門部会」を設ける。

- ・ 授業科目・担当教員別の成績評価分布状況一覧表で突出した数字になっている例について、小委員長名で事情を問い合わせる。
- ・ 学生による授業評価アンケートの結果は各科目の企画責任者に送り、授業の改善に役立ててもらおう。
- ・ 成績評価および授業評価アンケートの結果の中期的・継続的な分析を高等教育開発研究部にお願いする。

報告事項2では、オフィスアワー、クラスアワーについてのクラス担任のアンケートで出された意見への回答を作成し、クラス担任と学部長に送ったことが報告されました。

平成16年度第1学期の履修調整の方法

報告事項4では、平成16年度第1学期の履修調整の方法が報告されました。

- ・ フィールド体験型の一般教育演習（集中授業）の履修受付は、6月以降におこなう。
- ・ 論文指導講義の担当教員による履修調整の上限を、35名にする。
- ・ 外国語A・B演習および外国語Cの履修調整で、1回目に定員に満たない科目について追加履修受付をおこなう。

高校生の全学教育科目への参加の試み

報告事項7では、センター研究部と旭丘高校教員による高大連携授業研究会の今年度の研究報告書の概要が報告され、来年度は試行的に旭丘高校生を複合科目を中心とした全学教育の授業に参加させる計画があるので、同報告書がセンター運営委員会に報告されたあと、来年度早々にも全学教育委員会で実施方法を検討することが報告されました。

（安藤厚 文学研究科教授・センター長補佐）

表 2004 (平成16) 年度全学教育科目における各部局の授業担当状況

表 2004 (平成16)年度全学教育科目における各部局の授業担当状況 (続)

高等教育

HIGHER EDUCATION

ますます重要になってきたTA研修会

今年度の全学教育のTA任用者数は延べ515名（対前年度比8.3%増）に達し、研修会参加希望者も300名になりました。そのため会場を大講堂としました。また、医学部・歯学部からの学部TAの参加希望者が70名近くになったため、午後の分科会を2つ増加しました。「論文指導」および「医学・歯学」分科会は昨年まではなかったものです。大学院生が初めて教育に関する研修を受けるこの会の重要性が認められ

てきました。すべての課程を修了したTA任用者は全学教育TAで164名、学部TAで45名でした。これらの任用者は、来年度以降の研修を受ける必要はありません。研修は以下のようなプログラムで開催されました。

研修の目的は以下のように要約されます。

1) 大学教育の基礎を理解する

表 平成16年度北海道大学TA研修会プログラム

日時：2004年4月6日（火）

会場：N棟 2階演習室（主会場）

主催：高等教育機能開発総合センター

<プログラム>

9:30 挨拶 中村睦男 総長

9:35 講演

「北海道大学の全学教育」

佐伯浩 高等教育センター長，安藤厚（30分）

10:05 講演

「Teaching Assistant」瀬名波栄潤（30分）

10:35 休憩（10分）

10:45 ミニ講義 「大学教育の基礎について」

西森敏之（15分）

11:00 パネル討論

「TAの可能性～現状と理想」（40分）

司会：瀬名波栄潤

パネラー：猪上徳雄，奥聡，原奈々絵（学生），吉野潤（学生）

質疑応答（15分）

12:00～13:00 昼食

13:00～13:30 コーヒーブレイク（自由参加）【N245】

TA経験者の談話 原奈々絵（学生）

吉野潤（学生）

13:30 系ごとのグループセッション（150分）

A. 一般教育演習【N304（主会場），N231, N232, N233】：

小笠原正明，鈴木誠，山岸みどり

グループ学習の実際（15分）鈴木誠

グループ討論（ケーススタディ）

B. 講義【大講堂（主会場），N281, N270, N271】：

西森敏之，原奈々絵

AV機器の使い方，論文指導の実際：西森敏之

グループ討論

C. 論文指導【N245】：瀬名波栄潤

論文指導の実際，グループ討論

D. 情報【情報基盤センター 1階会議室】：

大内東，村井哲也，川村秀憲，岡部成玄，

上村郷志（学生）

情報処理教育について（10分）

：村井哲也，川村秀憲

情報処理TAの実際（20分）：上村郷志

グループ討論：

情報処理教育特有の問題について（120分）

E. 実験【N302（主会場），N242, N243, N244】：

米山輝子，栃内新，細川敏幸

実験指導とTAの役割：米山輝子（20分）

栃内新（10分）

グループ討論（120分）

F. 語学【N270】：宮下雅年，奥聡

語学教育のポイント

G. 医学・歯学【N282（主会場），N282, N272, N273】：

吉岡充弘，小橋元，石川雅彦，細川敏幸

実験指導とTAの役割 細川敏幸（20分）

グループ討論（120分）

- 2) 全学教育の趣旨を理解する：目的，意義，全体での位置づけ
- 3) 専門教育に還元できない基礎的な教育技術，心構え，教育理論について理解する
- 4) 担当する科目の内容と教授法を理解する
- 5) TA相互の交流をはかる

最後に，各分科会での様子を報告いたします。

「一般教育演習」を中心とする授業支援のためのTAのグループの分科会は，センターのN304教室で行われ，約60名の参加者がありました。入学者選抜企画研究部の鈴木教授により，まずアイスブレイキングの実習が行われました。背中に貼ったカードの内容をあてるゲーム感覚の内容で，会場の雰囲気がいっぺんに和らぎました。そのあと，討論にうまく参加できない学生をどのように扱うかについて6つのグループに分かれて，演習室で討論が行われました。グループ討論の結果の報告では，学生の性格についてのさまざまな分析が行われ，教員とは少し異なる観点からの解決法が紹介されました。

「講義」分科会では，まず30分ほど共通教育掛の土本さんが講義室の様々な機器や出席カードなどについて話し，大講堂担当のTAには特別に機器の使い方を10分程度説明しました。その他のTAはただちに講義室N281に移動し，作文添削を「書く力がつくように」添削し「もっと書きたくなるように」コメントするという課題で4グループ（西森敏之担当）に分かれて行いました。遅れてN281に移動してきた大

講堂担当のTAのグループ（原奈々絵担当）は大講堂での学生の振る舞いに関するケーススタディを行いました。最後に発表会をしましたが，大講堂のグループの発表は質問が相次ぎました。作文添削の発表では作文の丁寧な分析がありグループ討論での盛り上がりが見えました。アンケートの結果では例年のようにグループ討論がよかったというTAが多くいました。

「論文指導」分科会では，まずハンドアウト「論文指導授業」にしたがって，文章の種類，文章を書く時の基本，3種類の論文執筆スタイル，指導並びに評価方法についての講義を瀬名波教授が行いました。続いて学生達は二つのグループに分かれ，それぞれの課題に取り組みました。一つのグループは，学部1年生の書いた論文の添削，もう一方のグループは学部3年生による同課題の論文2本の評価でした。まず，出席者が個人で添削・評価し，それからグループでTAとしての論文指導の留意点等について意見交換してもらい，発表を行いました。TAの共通した意見としては，同じ添削・評価基準で同じ論文に取り組んでみても，その結果はTAによって大きく異なること，科目担当教員との意思疎通が非常に大切であること，そして「論文指導」は予想以上に難しい仕事であること，が挙げられました。

「実験」分科会では，実験指導とTAの役割として2名の教員からミニ講義を受講した後，5グループに分かれグループ学習を行いました。グループの名前を決めることでグループ学習の手順を知り，つぎ

に資料に例示されたケーススタディによりTAのすべきことを議論しました。今回は、事故に対する予防と処置（事例3,7）、学生に発言を促す手法（事例5,6）、時間内に終わらせる方策（事例9）など、よくある事例をとりあげました。どのグループも50分の時間内に多岐にわたる解決方法を提出することができました。いずれも、身近に起こりうることなので、今後の仕事に即座に役立つ発表になったものと期待します。

「語学」分科会に今回参加した語学のTAは英語担当と中国語担当です。前者は全員がCALL授業に配置され、後者も4名がCALL授業のTAです。CALL授業TAは翌日（4月7日）開催の言語文化部CALL授業講習会に出席しなければならず、そのため午後の分科会では英語TAには簡単な注意事項を述べるだけに止めました。しかし、中国語は、李助教授や清水助教授も加わって、詳細かつ具体的な討論をしました。

中国語TAの重要な任務のひとつに発音練習の補助がありますが、それは教科書の模範朗読だけでなく、個々の学生と対面して行う場合もあり、まず、身だしなみの清潔感が求められるということ、またTA自身、母語話者であっても、授業前に予行演習しておくことが大事であることなどの指摘がなされました。出勤簿の押印について、印鑑の大きさが中国と日本では随分違うので注意すること、小テストの採点についても、中国の習慣では「」（チェック記号）を の意味で使うのに対して日本では×として使うなど、文化の違いが話題になり、盛り上がりま

した。

翌4月7日の午後1時から言語文化部110室で上記の講習会が行われ、教員とTAを含めて50名ほどの参加者がありました。まず、北海ビデオの担当者がCALL教室の各種機材の使用法と主なアプリケーションの名称・特徴を要領よく説明し、その後、鈴木助教授、河合助教授、奥助教授による模擬授業が行われました。TAのみなさんはメモを取りながら熱心に聞き入っていました。CALL授業のTAといえば、PCトラブルに対処することを思い描きがちですが、それにとどまらず、ペアワークなどで授業に参加することもあるという実践事例を知り、有益でした。TAは4時に解散しました。なお、来年度はTA研修会とCALL授業講習会をうまく連動して1日で終了できる体制にする必要があると思います。

「情報」分科会では、はじめに教官から北大全学教育における「情報処理I, II」の位置づけについて簡単な説明があり、その後TA経験者である上村さんの方よりいままでの情報処理教育の実態とその問題点、対策についての講演をしていただきました。そのなかで、PC初学者のセキュリティ意識の問題点とその対策、学生間のデジタルデバイドの問題、演習時における学生とのコミュニケーションの取り方などについて、特にTA初心者についてアドバイスがありました。その後、講演を受けて具体的に想定される状況についてとその対策について全員で議論を行い、よりよい情報処理教育のTA実施へ向けて全員の理解を深めることが出来ました。大変有意義な研

修会になったと思います。

「医学・歯学」分科会では今年は医学部より3人の教員が担当いたしました。総合診療部の石川助手，老年保健医学の小橋講師，神経薬理学の吉岡教授がグループ討論方法の概説とアイスブレイキングを行いました。学生は7つのグループに分かれ，TAとして実際に実験・実習に携わった場合の危機管理についてそれぞれのテーマで議論し，発表しました。討論および発表準備の時間は限られていましたが，どのグループもよく整理された発表で，実際に役に立つ議論が展開されました。特に議論されたTAに発生する責任については教員との事前のコミュニケーションが重要であることが認識されました。

おわりに

アンケートの集計によると，「最も有益だったプログラムは何か」という問いかけに対して，175名中

127名が午後のセッションをあげています。30名のパネル討論「TAの可能性～現状と理想」，14名の「Teaching Assistant」がこれに続きます。グループ学習の教育効果が高いことがわかります。パネル討論では，2名のTA経験者の経験談と，TA研修の先進的な取り組みをしている水産学部の取り組みが高く評価されました。体験に基づく瀬名波先生の講演も毎年人気があります。

対象者数が激増しているために課題も出てきました。まず，午後のグループセッションを効果的にするため多くの教員に担当をお願いしなければなりません。今回は医学部・歯学部からの申込者が多くなったので，医学部の教員に急遽依頼することになりました。また，業務内容に応じた分科会が望ましいのですが，申し込み書類からの分類では適切でない場合があります。申し込み形式変更の必要性が示唆されました。

写真3. インパクトが大きかったパネルディスカッション

写真4. アンケートで最も有用だとされたグループ学習の様子

TAと受講生との関係

工学研究科分子化学専攻修士課程2年 原 奈々絵

はじめに

私は平成15年度前期の総合講義「北海道大学の人と学問」でTAを行いました。この講義は水曜日と金曜日の週2回あり、約2週間ごとに様々な学部 of 先生が講義を行います。水曜日は約500人、金曜日は約300人が受講し、私はもう一人のTAと共に水曜日を担当しました。主な仕事内容は講義中の資料提示などの講師の補助や、出席確認を兼ねたコメント用紙を配布・回収し、学部ごとに分別して授業担当教官に届けることでした。大講義室で行われるこの講義では、学生の授業態度から成績を評価することは困難であり、出席状況とコメント用紙の内容が評価対象となります。代筆や「良かった」、「～が興味深かった」など数行のコメントしか書かれていない所謂3行レポートなどもっての他です。これを踏まえ、世話役のO教授からTAに出された要求は次のようなものでした。

「この講義は北海道大学の教養科目の規範となるようなものでなくてはならない。そのため、学生にはそれなりの態度で受講して貰わなくては困る。特に、出欠に関しては厳しく指導して欲しい」

我々TAは期待に沿えるよう、まず前任者Dさんの話を聞きました。Dさんの体験談はこのようなものでした。

- ・ 学生は何度も出入りを繰り返し、必死に他の学生の分の用紙を貰おうとする
- ・ 用紙に印を付けて調べた所、代返者が約1割いた
- ・ 他の授業ではそんなに厳しくないと言った反抗する学生もいる
- ・ 学生には毅然とした態度で接しなさい

Dさんのアドバイスをもとに我々は様々な対策を立てて講義に望みました。

受講者に人数制限を設けたこの講義では、初回に受講票を貰わねば履修することが出来ません。講義初日は授業開始30分から既に列がで始め

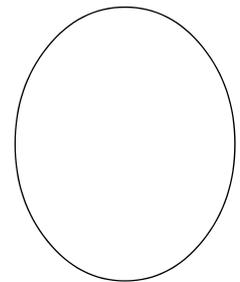
め、15分前には延びた列が教務前の通行を妨げようとしていました。それはさながらデパートの初売りに並ぶ買い物客のようでした。列からはみ出ようとする学生、どさくさに紛れて割り込もうとする学生、慣れない列整理に酷い倦怠感を感じ、あまり順風満帆とはいえない仕事始めでした。しかし、めげてはいられません。何事も初めが肝心です。学生に紹介された際、我々は受講生達にはっきりと宣言しました。

「この講義は出欠に厳しく取り組みます。いかなる理由があろうと、授業開始15分後から1秒でも過ぎたらコメント用紙は渡しません。代返などの不正も取り締まります」

一瞬、受講室はざわめきに包まれました。こうして、受講生との対決は始まりました。

1. コメント用紙、代返、遅刻、その他

翌週から我々は講義開始30分前に講義室に集まり、1つの入口を残して他の全ての入口に鍵を掛けて『出入禁止』の貼り紙をしました。すると、Dさんの行っていた通り、出入りを繰り返して複数枚のコメント用紙を貰おうとする学生が確認できました。その都度注意すると、学生はバツが悪そうにしながらも素直に引き下がり、数週間後には出入りを繰り返す学



生は殆どいなくなりました。

もう一つの不正、代返についてもDさんの方法を参考に対処しました。コメント用紙は教務で用意してくれますが、予め必要枚数を貰い、隅の方に小さなイラストを印刷して目印としました。同じ絵柄では複製されてしまうので、毎週異なる意匠を用いました。初めは印のないものが1割ほどありましたが、目印をつけていることを学生に公表してからは、先週のコメント用紙を用いるもの、鉛筆やボールペンで複製を試みたものなどが数点見つかりましたが、代返は激減しました。3行レポートを書いていた学生も、見られていることを意識し始めたのか、真面目な感想文を書くようになりました。

最大の課題だったのは遅刻。初回到に宣言した通り、1秒でも遅刻した学生にはコメント用紙は渡しませんでした。しかし、納得する者は稀で、遅刻者は一様に抗議するのです。

「自分の時計ではまだ15分たっていない」

正直、腹が立ちましたが、我々が逆上しても仕方がありません。なるべく穏やかに、しかし毅然とした態度で対応しました。

「そうですか。しかし、日本標準時間で出席を取っているのに残念ですが受け付けられません」

携帯で117に繋ぎ、時報を聞かせるとしびしびですが納得してくれました。そのまま帰ってしまう学生もいましたが、講義は2週で1セットが基本なので、来週のために講義を聴いて自前のレポート用紙などに感想を書いて提出してはどうかと提案すると受講していく学生が殆どでした。講義内容は非常に面白いものでしたし、たった数分で欠席になるのが惜しいと思ったのか、徐々に遅刻者も減っていきました。

2. 良い関係も

このように書くとTAと学生との関係は険悪で、その業務は苦痛に満ちたものだったと思われるかもしれませんが、そうではありませんでした。コメント用紙を渡す時に親しげに挨拶をしてくれる学生もいましたし、コメント用紙の空いた所にTAへの要望を書いてくれと頼んだところ、様々な意見が寄せられました。温かい労わりや励ましの言葉をくれる学生もいましたし、講義室の温度調節や照明など指摘されて始めて気付く問題点も多く、より良い講義環境作りの参考になりました。

講義担当者との関係も忘れてはいけません。TAの定位置は教官に最も近い、アリーナ席です。緊張感を持って講義内容を楽しむことができます。そして、他学部の第一人者との交流は研究者としても良い刺激となりました。

さいごに

指導する立場は辛いと思います。言って分かる人が殆どでしたが、不正が完全に無くならなかったことから分かってくれない人がいるのも事実です。良かれと思って言った事で疎まれたり、嫌がられたりもします。それでも、指導しないでその人が他の人に迷惑をかけてしっぺ返しを受ける可能性があるならば、今の内に気付かせてあげたいですし、直ぐには気付かなくても考えるきっかけを与えたいと思います。初めはただ不正を無くすことに躍起になっていましたが、試行錯誤を繰り返す中で、学生のためにはどうしたら良いか、という事を考えるようになりました。これこそが教育の本質ではないでしょうか。TAは単なるアルバイトではなく、学生と共に自らも成長できる機会であると思います。是非、この経験から多くのものを学んで頂きたいと思います。

e-LearningシステムHuWeb利用者1000名を超える

一昨年10月から運用を開始しましたHuWebは、利用科目数が50科目を超え60余名の教員が利用するようになりました。学生の登録者数は1000名を数えるようになりました。

一週間に一回しか顔を合わせることができなかったクラスの学生や教師が、このシステムを利用することで、いつでも連絡を取ることができるようになります。HuWebは5つの機能を備えたコミュニケーション・ツールで、学生と教師の情報交換の場を、教室内だけではなく教科別のホームページへと拡げます。それぞれの科目のホームページでは、図と文字で構成される任意の形態のホームページ、学生が

書き込める掲示板（ミーティングルーム）、学生全員に一度に送れるメーリングシステム、任意のホームページへのリンク、任意のフォーマットのデータをやりとりできるアップロード・ダウンロードシステムを独自に利用できます。

学期途中でも登録できます。ご利用ご希望の方は、以下の連絡先までメールをお送り下さい。

申込先

高等教育機能開発総合センター 細川 敏幸

e-mail : thoso@high.hokudai.ac.jp

写真. HuWebの入室画面

初習理科教育はじまる

昨年度のセンターの研究会“大学における初習理科の研究”の成果を受けて、本年度から物理、化学、生物の4科目での教育が始まりました。授業の担当は、研究会の研究委員が主体となっています。初習理科は2006年度入学者の学習量の低下や未履修科目への対応を考えて構成されています。授業は講義、実験、演習から構成され大人数を対象に実施しています。学生は大講義室で演示実験を見るとともに講

義を聞きます。残りの時間は、小教室に分かれて演習を行い、学習を補強します。演習だけ次の週に実施する場合があります。これまでの、小クラスを対象にした講義のみの授業とはかなり異なるため、担当の教員とTAだけではなく受講する学生にも意識改革が必要になります。現状にあわせて細部の調整も必要ですが、2年後の激変に対応した仕組みと授業方法が確立されることが期待されます。

写真1. 大人数授業の様子（物理）

写真2. 演示実験の様子（物理）

センター CENTER

「高等教育機能開発総合センター研究発表会」 開催される

去る3月29日に「平成15年度高等教育機能開発総合センター研究発表会」が開催されました。今年度の研究発表会は、午前の第1部では、「10年を迎えた高等教育機能開発総合センターの課題」をテーマにセンターの専任教官からそれぞれ問題提起を行い、今後の本センターのあり方についてディスカッションを行いました。午後の第2部では、「法人化後の高等教育センターの役割と課題」をテーマに外部の研究者を4名お招きし、講演・報告をいただきました。仙波先生の講演では、カナダ・ダルハウジー大学での事例をもとに、カナダの高等教育について詳細な報告をいただきました。また、報告者である3人の先生方からは、海外の事例、大学での実践事例、今後の高等教育センターのあり方など示唆に富む報告をいただきました。これらの講演・報告の後、参加者でディスカッションを行いました。プログラムは以下のとおりです。

日時：平成16年3月29日（月）

場所：情報教育館4階 共用多目的教室（1）

内容

午前：第1部「10年を迎えた高等教育機能開発総合センターの課題」

専任教官からの問題提起とディスカッション

午後：第2部「法人化後の高等教育センターの役割と課題」

講演「カナダの高等教育」

カナダ・ダルハウジー大学医学部教授
報告

「イギリスの大学展望 独立自治法人」

秦 由美子

滋賀大学経済学部助教授

「法人化後の高等教育センターのあり方」

羽田 貴史

広島大学高等教育研究センター教授

「愛媛大学大学教育総合センターの取り組み」

佐藤 浩章

愛媛大学大学教育総合センター助教授

写真：講演をするカナダ・ダルハウジー大学仙波和恵教授

生涯学習フォーラムが開催されました

生涯学習計画研究部が主催する生涯学習フォーラム（平成15年度第3回及び第4回）が去る2月26日及び3月12日に開催されました。

2月26日に開催された第3回フォーラムにおいては、国立学校財務センター教授の丸山文裕氏を招き「運営費交付金と授業料」と題して講演をいただき、これをもとに活発な意見交換を行いました。

丸山氏からは、運営費交付金と授業料の関係、授業料水準の設定における決定要因などについて詳細な報告をいただき、これをもとに参加者とともにディスカッションを行いました。

また、3月12日に開催された第4回フォーラムにおいては、同志社大学商学部教授、本学高等教育機能開発総合センター客員教授の岡本博公氏を招き、「近畿インターンシップ研究会の経験から」と題して講演をいただき、これをもとに活発な意見交換を行いました。

岡本氏からは、近畿インターンシップが実施したアンケート調査結果について詳細な説明があり、特に、インターンシップを経験した学生は、そうでない学生と比べ、就職した後の離職率が大幅に低いことなど注目すべき調査結果が報告されました。

写真. 講演をする丸山教授

平成15年度生涯学習計画セミナーを実施しました

生涯学習計画研究部では、地域で生涯学習やまちづくりに住民と共に取り組む自治体職員、社会教育専門職員、大学開放を進める大学生涯学習担当職員を対象に、今日求められる生涯学習のあり方、地域づくりと生涯学習・社会教育の関係、住民の学習を支える社会教育職員や自治体職員の役割について学習する継続教育型の公開講座として、毎年「生涯学習計画セミナー」を開催してきましたが、平成15年度は、3月13日に開催しました。

14年度に引き続き「生涯学習・社会教育の公共性を考えるPart？」として、市町村の生涯学習担当者に学習ニーズの聞き取り調査を実施（総長裁量経費の配分を受けました）し、それをもとに内容を企画し、自治体財政の危機の深まり、市町村合併の推進のもとで、その公共性があらためて問われている生涯学

習・社会教育について、市民の学習活動の発展を基礎にどのように展望をきりひらくかについて実践を交流しあいながら学びました。

参加者は、北海道立生涯学習推進センター、恵庭市教育委員会、長沼町教育委員会、由仁町教育委員会や地域のボランティアリーダーの方たちでした。講師は生涯学習計画研究部専任教員の他に、教育学研究科の姉崎洋一教授、丸山美貴子助手などが当たり、講師陣と受講者が円卓を囲む「ラウンドテーブル方式」により、それぞれが実践で抱える課題を報告し、それにコメントを加えるというスタイルで講座が行われました。大学と地域の生涯学習支援者・実践者の交流の大切さを確認して講座を修了しました。

「インターンシップセミナー2004」開催される

去る3月4日に「インターンシップセミナー2004」が、北海道地域インターンシップ推進協議会、北海道経済産業局、財団法人北海道地域総合振興機構の主催で京王プラザホテルにおいて開催され、企業、大学関係者、行政機関、学生など約80名の参加がありました。今年度のセミナーでは、北海道地域におけるインターンシップの理解と関心を高め、より質の高いインターンシップの実施を促すため、長期実践型インターンシップを道内企業や学生に紹介することを中心テーマとして開催いたしました。本セミナーでは、長期実践型インターンシップについての講演や事例紹介などを行いましたが、従来から実施している2週間程度の体験型インターンシップの重要性についての意見もあり、多様なインターンシップの実施の必要性を再認識させられました。プログラムは以下のとおりです。

日時：3月4日13：00～17：00

場所：京王プラザホテル

内容：

1．講演

テーマ1

「インターンシップの現状と新たな方向 長期実習のあり方を探る」

岡本 博公氏

(同志社大学商学部教授、本学高等教育機能開発総合センター客員教授)

テーマ2

「ベンチャー企業における長期実践型インターンシップの魅力と可能性について」

山内 幸治氏

(NPO法人ETIC.事業統括ディレクター)

2．事例発表

- (1)道外企業：株式会社デジサーチアンドアドバタイジング 代表取締役 黒越 誠治氏
- (2)道内企業：株式会社サンエス・マネジメントシステムズ 代表取締役 宮田 昌和氏
- (3)学生：北海道大学法学部3年 三田村 つかさ

氏（富岡公治法律事務所でインターンシップを体験）
 コメンテーター：亀野 淳氏（北海道大学高等教育機能開発総合センター助教授）

インターンシップ説明会開催される

今年度、インターンシップに参加を希望する学生を対象としたインターンシップ説明会を4月12日、13日に高等教育機能開発総合センター生涯学習計画研究部、キャリアセンターの主催で開催しました。昨年度を大幅に上回る約180名の参加がありました。この説明会では、インターンシップの趣旨・目的、全学インターンシップ受講にあたっての手続き、今後

のスケジュールなどを説明するとともに、昨年度インターンシップに参加した学生の事例発表を行いました。この説明会を受けて、今年度のインターンシップ参加希望者の申込を行い、146名（昨年度61名）の参加希望者がありました。

参加希望者の内訳は以下のとおりです。

表 平成16年度 全学インターンシップ参加申込情報

学年 学部・研究科	学 部				大学院	合 計
	1年	2年	3年	4年	M1	
文	3 (0)	1 (0)	2 (6)		1 (0)	7 (6)
教育	1 (0)		4 (1)			5 (1)
法		4 (1)	28 (8)		1 (0)	33 (9)
経済	1 (1)	6 (2)	26 (21)	(1)	1 (1)	34 (26)
理		2 (0)	7 (1)	1 (0)	3 (1)	13 (2)
工	1 (0)	2 (4)	12 (0)	2 (1)	10 (1)	27 (6)
情報					4 (-)	4 (-)
農	2 (0)	1 (0)	10 (7)	1 (0)	(2)	14 (9)
水産	1 (0)	2 (0)				3 (0)
歯			1 (0)			1 (0)
薬			1 (0)			1 (0)
地球環境					4 (2)	4 (2)
合 計	9 (1)	18 (7)	91 (44)	4 (2)	24 (7)	146 (61)

(注) ()内は昨年度の申込者数

生涯学習者を育てる試み キャップストーンプログラムとしての学生調査実習

生涯学習計画研究部では、生涯学習における地域と大学との連携を生かして、学生を生涯学習者として育てることが大学に期待される役割だと考えてきましたが、昨年度は幸いにも教育学部の社会教育研究室の協力を得て、同学部の前期授業「社会教育調査実習」（鈴木敏正教授・宮崎隆志助教授・丸山美貴子助手）において、学生が実施した地域調査の結果を、「さっぽろ市民カレッジ」（札幌市教育委員会、札幌市生涯学習振興財団）の「まちづくりセミナー」で発表し、市民とともに学び合う機会を生涯学習計画研究部も加わるいくつかの機関とのコラボレーションによって実現しました。この事業は、昨年度の成果を確認し、今年度も継続することが合意されました。

学生・院生が調査を実施した札幌市中央東地区は、札幌では歴史の古い地域で道内最大の酒造工場「千歳鶴」の工場やかつて"市民の台所"といわれた「二条市場」がある地域です。都心に近接しながら創成川とアンダーパスで分断され、近年の都心開発から取り残され、高齢化が進んできました。しかし、都心部としては地価が安く、通勤にも便利なことから、マンションが林立するようになり、都心の小売業やサービス業で働く若い人が住み始め、その人たちが地域で子どもを生み、子育てに取り組むようになり、子どもの数も増え、

公園などの生活施設の不足に不満を感じるようになってきました。しかし、高齢者中心のコミュニティリーダーは若い人が町内会に参加してくれないと嘆きながらも、そうした事実の進展を十分に把握していないこと、したがって子育てを支援するコミュニティの取組も少ないことがわかりました。

10月から始まった「さっぽろまちづくりセミナー：都心居住をテーマにまちづくりを考える」（コーディネーター：後藤元一札幌市立高専教授）では、地域住民やまちづくりNPOの人々と共にフィールド調査やワークショップを体験し、最終日には札幌高専の学生たちと共に中央東地区の「レッツ中央」を会場に授業で行った調査と「まちづくりセミナー」で学んだ成果を合わせて発表、コミュニティのリーダーの人たちとの討論が実現しました。

授業で実施した調査の報告書『都心の暮らしと生涯学習』が社会教育研究室からこの3月に刊行されました。5月7日には、今年度の社会教育調査実習においても中央東地区での調査を継続して実施し、「まちづくりセミナー」にも参加する方向で、札幌市立高専の後藤元一教授のお話を聞く機会がもたれました。その場に生涯学習計画研究部と札幌市生涯学習振興財団も同席し、今後の地域連携の方向についても協議を行いました。

センター日誌

CENTER EVENTS, February - March

2月

- 5日 ・ (会議) 第2回公開講座実施部会
・ (会議) 第7回教務委員会教育戦略推進WG
- 6日 ・ (会議) 第24回教務委員会教務情報システム
専門委員会
・ (会議) 第21回教務委員会共通授業検討専門
委員会
- 9日 ・ (会議) 第29回生涯学習計画研究委員会
- 13日 ・ (会議) 第3回北海道進学コンソーシアム実
施委員会
- 16日 ・ (会議) 第14回教務委員会教育システム弾力
化検討専門委員会
・ (会議) 第25回教務委員会教務情報システム
専門委員会
- 17日 ・ (会議) 第6回教務委員会教育戦略推進WG
教育課程専門部会
・ (会議) センター教官会議, センター長連絡
会
- 18日 ・ (会議) 第26回高等教育開発研究委員会
- 19日 ・ (会議) 第111回全学教育委員会小委員会
- 20日 ・ (会議) 第32回教務委員会幹事会
・ (会議) AO入試委員会
- 23日 ・ (会議) 第54回全学教育委員会
- 25日 ・ 北海道大学前期日程試験
・ センターニュース第52号発行
- 26日 ・ (会議) 第5回教務委員会教育戦略推進WG

学生編成専門部会

- ・ (会議) 入学者選抜企画研究委員会
- ・ (会議) 第30回教務委員会

3月

- 3日 ・ (会議) 第50回センター運営委員会
- 5日 ・ (会議) 平成15年度第4回センター予算・
施設委員会小委員会
- 6日 ・ 北海道大学前期日程合格発表
- 8日 ・ (講演) AO入試の選抜形態に関する講演・討
論
- 9日 ・ (会議) ITを用いた広報戦略研究会
- 11日 ・ (会議) 平成15年度第4回センター予算・
施設委員会
- 12日 ・ 北海道大学後期日程試験
- 14日 ・ (行事) Z会北海道大学進学講演会
- 16日 ・ (会議) 第8回教務委員会教育戦略推進WG
・ (会議) 第51回持ち回りセンター運営委員会
- 17日 ・ (会議) センター教官会議
- 22日 ・ (講演) アドミッションセンター講演と討論
の集い
- 23日 ・ 北海道大学後期日程合格発表
- 24日 ・ (会議) クラス担任代表会議
・ (会議) クラス担任全体会議
・ (会議) 第7回教務委員会教育戦略推進WG
教育課程専門部会

行事予定

SCHEDULE, June - November

	【日(曜日)】	【行事】	【備考】
6月	3(木)	開学記念行事日	休講
	3(木) ~ 6(日)	大学祭	休講
7月	27(火) ~ 28(水) 及び30(金)	補講日	
	30(金)	第1学期授業終了	
8月	2(月) ~ 12(木)	定期試験	
	13(金) ~ 17(火)	追試験	
	13(金) ~ 9月30(木)	夏季休業日	
	26(木) 正午	定期試験及び追試験成績提出締切	
9月	中旬 ~ 下旬	進級判定及び学科等分属手続	当該学部
	27(月) ~ 30(木)	集中講義期間	
10月	1(金)	第2学期授業開始	
	12(火) ~ 13(水)	1年次履修届受付	
		2年次以上履修届受付	当該学部
	13(水)	追加認定試験成績締切	
11月			

センターニュース 2004, No. 53 目次

<p>巻頭言 野口 徹 1</p> <p>平成15年度TOEFL-ITP実施状況 3</p> <p>全学教育委員会報告 4</p> <p>ますます重要になってきたTA研修会 8</p> <p>TAと受講生との関係 12</p> <p>e-LearningシステムHuWeb利用者 1000名を超える 14</p> <p>初習理科教育はじまる 15</p> <p>「高等教育機能開発総合センター 研究発表会」開催される 16</p> <p>生涯学習フォーラムが開催されました 17</p>	<p>平成15年度生涯学習計画セミナーを 実施しました 18</p> <p>「インターンシップセミナー2004」 開催される 19</p> <p>インターンシップ説明会開催される 19</p> <p>生涯学習者を育てる試み - キャップストーンプログラム としての学生調査実習 - 20</p> <p>センター日誌・行事予定 21</p> <p>目次・編集後記 22</p>
---	---

訂正

52号5ページの表3 2004年度全学教育部行事予定表において、「【8(木)に月曜日の授業を実施】」と誤った内容が記載されておりました。削除して下さい。お詫びして訂正いたします。

編集後記

4月、新年度がスタートした。法人化など北大も新たなスタートをきったが、この時期毎年変わらないのは、多くの新入生の姿である。彼ら彼女らの生き生きとした顔を見ていると、こちらの気持ちも若くなる。「初心忘るべからず」は彼ら彼女らに対する言葉ではなく、彼ら彼女らを見ながら約20年前に思い、自らを律する言葉なのかもしれない。若い彼ら彼女らと同じキャンパスで教育・研究ができる喜びを感じながら、1年間またがんばろうと決意を新たにしたところである。(かめ)

センターニュース 第53号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日：2004年5月25日

発行元：北海道大学高等教育機能開発総合センター

〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

電話 (011)716-2111 ・ FAX (011)706-7854

編集委員：小笠原正明・西森敏之・細川敏幸・

町井輝久・安藤厚・山岸みどり・鈴木誠・

池田文人・亀野淳

ご意見、お問い合わせは 印の編集委員まで

電話：(011)706-7514; FAX (011)706-7521

インターネット ホームページ：http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/center